

令和5年度
埼玉学園大学大学院
子ども教育学研究科 FD 活動報告書

令和6年5月8日
子ども教育学研究科
F D 委 員 会

目次

1	はじめに.....	1
2	FD活動に関する基本方針.....	2
2-1	FD委員会の委員構成.....	2
2-2	FD委員会の開催日及び議題.....	2
3	子ども教育学研究科教育体制.....	3
3-1	教育方針（ポリシー）.....	3
3-2	研究科長による3ポリシーの検証.....	4
3-3	教育実施体制.....	5
3-3-1	専任教員.....	5
3-3-2	客員教員.....	5
3-3-3	担当授業科目・研究指導.....	6
3-3-4	カリキュラム.....	7
3-3-5	時間割表.....	8
3-3-6	院生数.....	9
3-3-7	研究題目一覧.....	9
3-3-8	履修状況.....	10
3-3-9	定期試験.....	11
4	授業アンケート・授業報告.....	12
4-1	授業アンケート実施概要.....	12
4-2	教員の授業報告.....	12
5	研究発表会及び意見交換会.....	25
5-1	研究発表会.....	25
5-2	大学院専任教員・客員教員、大学院学生による意見交換会.....	25
5-3	専任教員と客員教員による意見交換会.....	25
6	論文審査について.....	26
6-1	修士論文中間報告会.....	26
6-2	学位論文発表会及び最終試験.....	27
7	おわりに(今後に向けて).....	27
参考資料1	埼玉学園大学大学院FD委員会規程.....	28
参考資料2	学生向け授業に関するアンケート実施のお願い.....	29
参考資料3	授業についてのアンケート（講義科目、研究指導科目）.....	30
参考資料4	教員の授業報告.....	31
参考資料5	中間報告会の振り返り.....	32

1 はじめに

埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科は、平成 27 年度に開設された。その目的は、教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量をもつ人材の養成であり、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材の養成である。これは、本学の教育理念である「広く社会に貢献できる人材を養成」に沿うものである。

設置後第 9 年度が終了した段階で、子ども教育学研究科における大学院教育が当初の教育目標を十分達成されたかどうかを検証し、もし不十分な点があれば早急に改善を図ることにより、同研究科の教育をより充実したものにするために、令和 5 年度埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科 F D 活動報告書を作成した。

2 FD活動に関する基本方針

子ども教育学研究科におけるFD委員会の基本方針と役割、FD委員会規程については、当初の通りで変更はない。(参考資料1)

令和5年度のFD委員会の構成員は、以下の通りである。

2-1 FD委員会の委員構成

委員等	所属・職名	氏名
委員長	FD委員長	堀田 正央
委員	子ども教育学研究科講師	石橋 優美
委員	子ども教育学研究科講師	大島真里子
委員	子ども教育学研究科講師	佐内 信之
委員	子ども教育学研究科客員教員	久保田善彦

2-2 FD委員会の開催日及び議題

令和5年度に開催された委員会の日時と議題は以下の通りである。

【令和5年度 FD委員会の開催日及び議題】

開催日	議題
令和5年 6月14日	(1) 令和4年度FD活動報告書について
令和5年 7月12日	(1) 令和5年度研究発表会の実施について (2) 令和5年度教育研究に関する意見交換会の実施について
令和5年 10月11日	(1) 令和5年度研究発表会の報告について
令和6年 1月10日	(1) 令和5年度意見交換会の報告について
令和6年 2月14日	(1) 令和6年度のFD活動について

3 子ども教育学研究科教育体制

3-1 教育方針（ポリシー）

【子ども教育学研究科修士課程】

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

子ども教育学研究科では、学校教育において複雑化・多様化する社会背景のもとに顕在化する多様な学校教育課題に教育学的内容知識を基に課題を正確にとらえ分析し、解決方策を構築し、それを実践知力まで高め、その実践結果を評価・改善し、理論化するという研究能力と実践理論を身につけた人材の養成を目的とします。このため、学位授与のためには、次のような条件を満たす必要があります。

1. 本学の教育課程において所定の単位を修得し、以下に示す教育研究及び教育実践力を修得したと判定されること。
 - ① 教育実践の省察をもとに、主体的・継続的に学び続け、自らの教育実践理論を構築することができる力量
 - ② 教職員と協働して学校組織における教育活動を活性化させる協働力
2. 本学の教育課程において教育課題の解決に関する理論的探究と実践的研究を行い、修士論文としてまとめ口頭試問に合格すること

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

1. カリキュラムの編成

子ども教育学研究科では、教育に関する専門的知識や専門職としての資質・能力の向上を図り、保育・教育の創造に主体的に取り組むことのできる実践的力量を有する人材を育成するために「理論を学ぶ科目」「理論と実践を往還する科目」「自らの教育実践理論を構築する科目」を構造化し、有機的関連を図ったカリキュラムを編成しています。

2. 教育の実施体制

各授業科目を担う教員が子ども教育学における教育・研究の使命をもち、保育・教育における高度な知識と実践的力量について互いに共有し、協働体制のもと教育を進めます。

3. 教育の評価

各授業科目は本学の理念・目的に沿った目標を定め、到達目標並びに評価の基準・方法を学生に周知し、成績評価を行います。また、FD委員会、研究発表会を定期的を開催し、学生による授業評価の結果をもとにカリキュラムの評価・改善を図り、教育の質保証をします。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

子ども教育学研究科では、「自立と共生」を理念に豊かな教養と子供に対する深い愛情と保育・教育に対する強い使命感をもち、高度な専門的知識と教育実践的力量を有する人材の養成を目指します。そこで、次のような能力・意欲・適性を持った学生を求めます。

- ① 学部段階で培われた資質能力をもとに保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者。
- ② 学校や地域において指導的役割を遂行できるスクールリーダーとなることを志向し、高度な実践力を修得しようとする者。

本研究科は、研究奨励目的に成績優秀な学生に選考により、最大2年間にわたり、返還のない奨学金制度を備えています。

3-2 研究科長による3ポリシーの検証

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

ディプロマ・ポリシーにおいて示された“自らの教育実践理論を構築することができる力量”は、複雑化・多様化する教育上の諸課題を解決し、教育課程を改善していくための「教師の高度化」に対応したものである。また“教育活動を活性化させる協働力”は、「チームとしての学校」に対応し、学校の組織文化や業務内容の改善にむけて不可欠なものと言える。前者においては各特論を始めとした子ども教育学基盤科目等、後者では本研究科の特色であるチーム・ティーチングによる子ども教育学演習科目等の学修を通じ、2年間で培うことができていると考える。直近の修了生では修士論文のテーマに悩みながらも、教員や他学生との協働によって多くの知見を得、科学的根拠に基づいた修士論文を作成し、一定の教育実践理論の構築に至った。1年次春期からの開講される教育課題研究では、諸科目から得た様々な知見を包摂し、長期的視野で論文作成の方向性を見出す上で重要な役割を果たし、その成果は修士論文の内容および報告会等での活発な議論にも現れている。今後も折々の社会からの要請に応えるべく、教育課程との整合性を取りながら、より高い教育の成果の質を担保するための評価・改善を継続していきたいと考える。

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

本研究科の教育課程編成においては各科目が担う範囲が多岐にわたり、職業的専門性と学問的専門性が密接することで、目的やディプロマ・ポリシーとの繋がりが見えにくくなる点が危惧される。本研究科においては各科目がどのような目的でどのような資質・能力を養うものであるのかを明示するために、「理論を学ぶ科目」、「理論と実践を往還する科目」、「自らの教育実践理論を構築する科目」としてカリキュラムを構造化し、学生/教員が学びの成果を確認しやすい教育課程を編成している。特に理論と実践の往還の観点からは、各学校をはじめとした学外との連携等が不可欠である。各科目における小学校や幼児教育施設との連携や、教育課題研究の一環としての各学会への参加、実務経験者による教育実践のナラティブ等を通じてこの点を担保している。今後も各学校や行政等との連携を深め、学校内外における多様な教育機会に触れることで教育実践理論構築に寄与する編成を企図していきたい。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

“保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者”、“スクールリーダーとなることを志向し、高度な実践力を修得しようとする者”の2点を意識し、入学者選抜においても教師としての展望と研究計画の内容を重視した。令和6年度の入学者は内部から4名であり、令和3年度入学者以降、外部受験者は出ていない。入学者は初等教育分野、幼児教育分野、福祉分野等の多様な進路を目指しているが、教育現場におけるダイバーシティ・マネジメントの必要性の観点からも、多様な背景に基づいた学部以前の学びを持った学生同士は、より有益な相互作用が期待できると考える。入学/進学者にはスクールリーダーへの志向と研究への十分な資質・能力を持ちながら、主体的かつ積極的に取り組む姿が見られており、アドミッション・ポリシーが適切に機能したと評価している。今後は外国籍を含んだ外部受験者の多様化が更に進むことも考えられ、アドミッション・ポリシーを遵守した公正な受け入れ態勢を維持・改善することに努めていきたい。

3-3 教育実施体制

令和5年度は、専任教員及び客員教員を併せて、18名の教員で授業・研究指導を行った。それぞれの詳細は、次の通りである。

3-3-1 専任教員

No.	氏名	職位
1	堀田 正央	研究科長
2	杉浦 浩美	教授
3	杉野 裕子	教授
4	長友 大幸	教授
5	増南 太志	教授
6	森本 昭宏	教授
7	吉野 剛弘	教授
8	奥住 桂	准教授
9	川喜田昌代	准教授
10	東元 りか	准教授
11	堀田 諭	准教授
12	石橋 優美	講師
13	大島真里子	講師
14	佐内 信之	講師
15	千崎 美恵	講師

合計 15 名

3-3-2 客員教員

No.	氏名	職位
1	久保田善彦	教授
2	中本 敬子	准教授
3	堀井 啓幸	教授

合計 3 名

3-3-3 担当授業科目・研究指導

各教員の担当授業は、下記の通りである。

埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科修士課程 授業科目及び担当教員

科目区分	科目名	担当教員	
子ども教育学講義科目	子ども教育学基盤科目	教育人間学特論	吉野 剛弘
		子ども発達特論	千崎 美恵
		学習心理学特論	中本 敬子
		発達障害支援特論	増南 太志
		子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美
		学校マネジメント特論	堀井 啓幸
		多文化子ども教育特論	堀田 正央
		教育方法学特論	石橋 優美
		教育実践研究特論	奥住 桂
		カリキュラム開発特論	久保田善彦
		教育メディア特論	—
	教科・保育内容関連科目	子どもの言葉特論（幼稚園）	佐内 信之
		子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之
		子どもの環境特論	長友 大幸
		子どもの数・図形概念特論	杉野 裕子
		子どもの科学認識特論	長友 大幸
		子どもの造形表現特論	森本 昭宏
		子どもの音楽表現特論	東元 りか
	子どもと道徳特論	堀田 諭	
子ども教育学演習科目	小学校授業実践演習	佐内 信之/杉野 裕子	
	幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	
	教材・環境開発演習	長友 大幸/森本 昭宏	
	いじめ・自殺・不登校問題演習	吉野 剛弘/増南 太志	
	地域連携プロジェクト演習	杉浦 浩美/堀田 正央	
研究指導	教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	堀田 正央/杉浦 浩美/杉野 裕子/ 長友 大幸/増南 太志/吉野 剛弘/ 奥住 桂/川喜田昌代/東元 りか/ 堀田 諭/石橋 優美/大島真里子/ 佐内 信之/千崎 美恵	

3-3-4 カリキュラム

本研究科の教育課程の具体的目標は、高度な教育理論と実践的な教育方法を培い、現代の教育におけるさまざまな問題を解決する教育実践理論の構築と、質の高いコミュニケーション能力により教育活動や課題解決に向け協働できる人材の養成である。

これらの目的を達成するために、「子ども教育学講義科目群」、「子ども教育学演習科目群」、「研究指導」の3科目群で教育課程を編成した。「子ども教育学講義科目群」は、「子ども教育学基盤科目」と「教科・保育内容関連科目」から構成している。具体的な編成は以下の通りである。

【教育課程の概要 子ども教育学研究科 修士課程】

学位又は称号	修士（教育学）	学位又は研究科の分野	教育学関係
卒業要件及び履修方法		授業時間等	
「子ども教育学講義科目」の「子ども教育学基盤科目」から4科目8単位以上を選択必修、「教科・保育内容関連科目」から2科目4単位以上を選択必修。「子ども教育学演習科目」から2科目4単位以上を修得。子ども教育学講義科目及び子ども教育学演習科目から24単位以上を修得すること。「研究指導」から6単位以上を修得すること。合計で30単位以上を修得し、かつ、修士論文を提出し、その審査及び最終試験に合格すること。		1学年の学期区分	2学期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業時間	90分

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験実習
子ども教育学講義科目	子ども教育学基盤科目	教育人間学特論	1	2		○		
		子ども発達特論	1	2		○		
		学習心理学特論	1	2		○		
		発達障害支援特論	1	2		○		
		子どもと家庭支援特論	2	2		○		
		学校マネジメント特論	2	2		○		
		多文化子ども教育特論	2	2		○		
		教育方法学特論	1	2		○		
		教育実践研究特論	1	2		○		
		カリキュラム開発特論	1	2		○		
	教育メディア特論	2	2		○			
	教科・保育内容関連科目	子どもの言葉特論（幼稚園）	1	2		○		
		子どもの言葉特論（小学校）	1	2		○		
		子どもの環境特論	1	2		○		
		子どもの数・図形概念特論	1	2		○		
		子どもの科学認識特論	1	2		○		
		子どもの造形表現特論	1	2		○		
		子どもの音楽表現特論	1	2		○		
		子どもと道徳特論	1	2		○		
子ども教育学演習科目		小学校授業実践演習	1	2			○	
	幼稚園教育実践演習	1	2			○		
	教材・環境開発演習	2	2			○		
	いじめ・自殺・不登校問題演習	2	2			○		
	地域連携プロジェクト演習	2	2			○		
研究指導	教育課題研究Ⅰ	1	2			○		
	教育課題研究Ⅱ	1	2			○		
	教育課題研究Ⅲ	2	2			○		
	教育課題研究Ⅳ	2	2			○		

3-3-5 時間割表

令和5年度 埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科時間割表

【春期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ~10:30				子どもの言葉特論 (幼稚園)	佐内 信之	312	多文化子ども教育特論	堀田 正央	312	子どもの言葉特論 (小学校)	佐内 信之	312			
2限 10:40 ~12:10	子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	312				いじめ・自殺・ 不登校問題演習	吉野, 増南	312	学校マネジメント特論	堀井 啓幸	408	子どもの音楽表現特論	東元 りか	音楽
3限 13:00 ~14:30															
4限 14:40 ~16:10										子ども発達特論	千崎 美恵	404			
5限 16:20 ~17:50										小学校授業実践演習	佐内, 杉野	312			
6限 18:10 ~19:40										教材・環境開発演習	長友, 森本	307 図工			

※「教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

集中講義

科目名	担当者	教室	日 程
学習心理学特論	中本 敬子	312	9/4、9/7、9/8の1~5時限目

【秋期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ~10:30				子どもと道徳特論	堀田 諭	311	地域連携 プロジェクト演習	堀田, 杉浦	309						
2限 10:40 ~12:10				教育実践研究特論	奥住 桂	311	教育人間学特論	吉野 剛弘	309						
3限 13:00 ~14:30	幼稚園教育実践演習	川喜田, 大島	312	子どもの教・ 図形概念特論	杉野 裕子	312				子どもの造形表現特論	森本 昭宏	304			
4限 14:40 ~16:10				発達障害支援特論	増南 太志	310							教育方法学特論	石橋 優美	312
5限 16:20 ~17:50				子どもの科学認識特論	長友 大幸	307									
6限 18:10 ~19:40										子どもの環境特論	長友 大幸	307			

※「教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

3-3-6 院生数

今年度（令和5年5月1日現在）本学大学院に在籍する院生の詳細は、以下の通りである

総数、入試形態別人数、年齢別人数、男女別人数

① 総数 2名

② 入試形態別人数（名）

	一般選抜	学内選抜
修士課程1年	-	1
修士課程2年	-	1

③ 年齢別人数（名）

	22歳～25歳	26歳～30歳	31歳～35歳	36歳～40歳	41歳～
修士課程1年	1	-	-	-	-
修士課程2年	1	-	-	-	-

④ 男女別人数（名）

	男性	女性
修士課程1年	-	1
修士課程2年	-	1

3-3-7 研究題目一覧

<修士課程1年>

- ・幼少期の保護者の養育態度と青年期の過剰対応の関連

<修士課程2年>

- ・幼児教育における子どもの主体性理解の検討
—保育のプロセスの質向上にむけて—

3-3-8 履修状況

履修状況及び定期試験実施方法は、次の通りである。

【春期】

科目名	担当者	受講者数
子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	2
学校マネジメント特論	堀井 啓幸	1
子ども発達特論	千崎 美恵	1
子どもの言葉特論（幼稚園）	佐内 信之	1
教材・環境開発演習	長友 大幸/森本 昭宏	1
子どもの音楽表現特論	東元 りか	1
学習心理学特論	中本 敬子	1
教育課題研究Ⅰ	堀田 正央	1
教育課題研究Ⅲ	堀田 正央	1

【秋期】

科目名	担当者	受講者数
発達障害支援特論	増南 太志	1
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	1
子どもの環境特論	長友 大幸	1
教育方法学特論	石橋 優美	1
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	1
教育課題研究Ⅱ	堀田 正央	1
教育課題研究Ⅳ	堀田 正央	1

3-3-9 定期試験

【春期】

科目名	担当者	試験内容
子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	レポート
学校マネジメント特論	堀井 啓幸	レポート
子ども発達特論	千崎 美恵	レポート
子どもの言葉特論（幼稚園）	佐内 信之	レポート
子どもの音楽表現特論	東元 りか	レポート
学習心理学特論	中本 敬子	レポート

【秋期】

科目名	担当者	試験内容
発達障害支援特論	増南 太志	レポート
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	レポート
子どもの環境特論	長友 大幸	レポート
教育方法学特論	石橋 優美	レポート
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	レポート

4 授業アンケート・授業報告

4-1 授業アンケート実施概要

令和5年度春期における授業を対象として7月に、秋期における授業を対象として12月に、院生への授業アンケートを実施した。対象科目は2名以上の講義科目である。

実施時期

春学期：令和5年6月26日（月）～ 7月7日（金）

秋学期：令和5年12月4日（月）～ 12月15日（金）

実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配布（参考資料2、3）、実施した。回答形式は、設問に対する自由記述式としている。今年度秋期より、回答用紙の回収については、Formsを用いて回収し、事務に提出することとした。

回答学生数

春学期：アンケート回収数2／履修者数（延べ人数）2（回収率100%）

秋学期：※対象科目無しの為、教員の自己評価のみ実施。

実施結果

結果は次項からの記載内容の通りであるが、全般的にきわめて満足のいく結果を得ることができた。授業アンケート用紙は参考資料として掲載している。

4-2 教員の授業報告

教員の授業報告は、担当した科目ごとについての教員による自己評価を行ったものである。

4-2 教員の授業報告

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 杉浦 浩美

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもと家庭支援特論	春期	2	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者になる上で、子どもとその家庭に対する支援を学ぶ必要があると考え、子どもとその家庭において求められる支援や現代の家族が抱える問題や困難について理解を深めるため。 ・ 様々な家庭環境がある中で、それぞれが抱える問題に対する支援にはどんなことが求められているかを学び、必要とされていることを自分で据えられるようになるため。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが育つ環境において、保育者の保育観や意識が大きく影響していることを学べた事や、研究の調査の仕方や分析・考察で重要な点等を学べた事が自身の研究に直結しており、実際に研究内容や調査について見直し検討する機会となったことで役立つことができた。 ・ 子どもを取り巻く環境が、子どもに大きく影響するとともに、子ども自身も自分たちで世界を作っていることを学べた事が研究をする上で調査の独立変数の選択などに役立った。また、研究の要点や調査の手順など、研究を進める上で重要となる部分を多く学べたことが役立ちました。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもと家庭における問題や子どものジェンダー構築について、文献購読や議論を行うことで、多角的視点から検討し意見交流ができ更に学びを深め、見解を広げられ。大変満足できた。 ・ 先生や先輩と一緒に考え、意見を伝え合うことで、自分にはない意見や、どのように考えるかを学ぶことができたため、非常に満足している。 <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特にありません（複数回答）。 ・ 先生や先輩と一緒に考え、意見を伝え合うことで、自分にはない意見やどのように考えるかを学ぶことができたため、非常に満足しています。 	<p>テキストは藤田由美子著『子どものジェンダー構築～幼稚園・保育園のエスノグラフィ』（ハーベスト社）を講読した。受講生2名ともが「子どもの主体性」という問題関心を共有していたことから、受講生と相談のうえ、選択したものである。子どもの生活世界における親との相互行為のみならず、保育士・幼稚園教諭との相互行為、子どもの側からの「主体的な」実践など、さまざまな側面から議論を重ねることができた。また、本テキストは博士論文を単行本化したものであり、量的調査と質的調査の両方が実施されている。受講生2名ともが、修論で調査を実施する予定であることから、博論の調査論文を丹念に読みこむことは有意義であると判断した。授業の後半では、調査方法のテキストなども取り上げながら、両名が調査実施に向けて具体的な計画が立てられるよう指導した。</p> <p>両名とも報告準備を毎回、熱心に行い、また自らの経験等もふまえながら積極的な意見交換を行ってくれたことで、議論を深めることができたと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 客員教授
氏 名 堀井 啓幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
学校マネジメント特論	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公教育の目的を実現するための学校経営に関わる基本的な事項 (PDCA サイクルなど) の理解や教育活動を支える人的・物的条件の理解など学校の基本的な仕組みがわかる。 ・教育改革の動向を踏まえ、地域とともにある学校やこれからの教師の役割について、実証的・多角的に分析・検証する経験を積み、批判・考察することができる。 	<p>この講義では、受講生それぞれの自己形成の過程や学校教育との関わりを「ふりかえる」ことを前提に、学校教育とは何か (子どもの立場にたった教育は可能か)、学校経営とは何か、学校の組織的環境を見直す、授業の環境を見直す、生徒指導の環境を見直す、中央教育審議会答申など教育改革と学校教育との関係を見直すなどの内容を含んで、子どもの安全や地域とともにある学校など教育の今日的な課題を教育制度学、教育経営学的に言及した。受講者が 1 名というマンツーマンの授業であったので、出来る限りこちらから問いかけ、一つの切り口から学校を巡る様々な問題について考察できるように心がけた。こちらの問いかけに対して常に積極的に意見や質問がだされた。特に履修生の保育やガールスカウトの経験から意見や回答、質問があり、幼保小連携や生涯学習との関わりについても学び合いができたように思われる。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 講師
氏名 千崎 美恵

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子ども発達特論	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達に関する主要理論や概念を理解できる。 ・子どもの発達過程と発達に影響を与える要因を理解できる。 ・現代の子どもを取り巻く発達に関わる問題を理解し、分析する視点を獲得する。 ・子どもの発達を支えるための発達支援の方法を探る視点を獲得する。 	<p>子どもの発達を多角的に捉える視点を持って深く理解することを目的とした。さらに、各自が探求するテーマの問題と目的への道筋の構築を意識して展開させた。</p> <p>そのために、発達心理学の主要な発達理論を概観した後、受講者の研究テーマに関する論文講読を行った。受講者が問題意識を持った論文を提示してレジュメを作成、授業内で発表し、教員とのディスカッションを通して、研究テーマの背景要因と問題意識を明確化していった。さらに、心理学の各方法論による論文を講読して、目的に合った研究方法と分析についての理解を促した。</p> <p>そのプロセスを繰り返すことにより、本授業の具体的目的である</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの発達に関する主要理論や概念を理解する。 2. 子どもの発達過程とそれに影響を与える要因を理解する。 3. 現代の子どもを取り巻く発達に関わる問題を理解し、分析する視点を獲得する。 4. 子どもの発達を支えるための発達支援の方法を探る視点を獲得する。について達成できたと考える。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 講師
氏 名 佐内 信之

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの言葉特論(幼稚園)	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児期を中心とした言語発達の多様な側面について理解し、幼児教育の現場における言語発達を支援するための実践的な知識を習得する。 	<p>乳幼児における言語の発達から学童期における読み書きの発達まで、テキストにしたがって購読を行った。また、学生の研究課題に合わせて、読み聞かせや対話などのテーマも取り上げた。ただし、履修者が1名のため、院生同士の議論ができない。そのため、教員も発表資料を作成し、意見交換を行った。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科

職 名 教授

氏 名 長友 大幸・森本 昭宏

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教材・環境開発演習	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児期から児童期の発達を捉え、学習への基礎を培う教材開発と環境開発の方法を修得することができる。また、学習活動を高める教材開発に必要な科学的概念を修得することができる。 ・小学校教員としての教材づくり、指導計画の立案と実施、評価を行うことができる。 ・事例を用いて教材の効果を分析・考察する手法を身につけ、研究や考察を理論と結びつけて自らの教育実践・発表に応用することができる。 	<p>各教師と学生が話し合いを重ねて、教育・保育現場での教材開発の重要性について理解を深めることができた。チームティーチングであり、かつ学生が一人であるため、個々の活動に対して十分に時間を取り、指導ができたと考えられる。反省点があるとすれば、熱心に学生と実験を通してディスカッションなどを重ね、毎時間放課後の授業を30分以上延長していたことであろう。理論と実践を往還しながら環境教育と体験学習、造形教育と教材製作を中心に、指導計画の立案と模擬授業を行った。具体的な教材研究は、身近なものを用いた科学工作や室内園芸について行う。また、幼児への対話型鑑賞教育や障害者アート（アールブリュット）についても触れた。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授
氏 名 東元 りか

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの音楽表現特論	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの年齢に応じた発達と表現との関連性をふまえた音楽活動の指導法について理解することができる。 ・音楽教育のあり方を深く学ぶとともに、教育現場における音楽活動の指導計画を立てることができる。 ・音楽を用いた教育方法の研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用することができる。 	<p>受講者が一人ということもあり、受講者の興味関心をより掘り下げ、思考を言語化する機会を設けられるよう、工夫した。特に、文献購読においては、一方的な教示とならないよう、積極的な議論と体験とを織り交ぜ、理解を深めた。このことにより、音楽的な観点からの考察のみでなく、実践に生かすための方法を身に着けることができたと考えられる。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 増南 太志

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
発達障害支援特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在の教育における子どもの発達障害の現状について理解する ・発達障害児の行動特性を学び、その行動を理論的に捉える視点を獲得する ・発達障害の原因となる問題をとらえるためのアセスメントについて理解し、対応方法を探る視点を獲得する 	<p>学生が意欲的に授業に取り組めるように、本人の研究と関連づけたうえで本授業を実施した。基本的に文献を読んでまとめ、授業日に教員とディスカッションを行った。受講者が1人であったため、そのようなやり方が可能であった。</p> <p>到達目標についてはおおむね達成できたと思われる。また、文献の読み方や研究に対する考え方を身につけてきていると思われる。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 森本 昭宏

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの造形表現特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児期から児童期の表現の発達を捉え、個に対応した造形活動の指導法について理解する。 ・造形教育のあり方について深く学ぶとともに、教育現場における芸術活動の指導計画を立てる。 ・子どもの様々な表現方法についての研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用する。 	<p>造形の様々な表現方法の日本との違いについて、主に海外の子どもを取り上げて紹介した。アルゼンチンの就学前教育と作品、スペインの子どもの鑑賞画作品、ドイツの幼稚園とドキュメンテーションなどである。アルゼンチンやオーストラリアの子どもの絵を実際に見ながら、海外の造形の発達段階について考察した。</p> <p>国内では埼玉県福祉部障害者アート展の取り組み、しかけ絵本や医療的ケア児へのデジタル絵本の紹介、ICTを活用した様々な造形表現について触れた。最後の課題として、近隣の市町村の公共空間を設定した親子対象の造形ワークショップ（親子工作体験）の企画を立案。ファシリテーター（促進者）の役割や学校現場以外での造形のねらいとあり方について研究した。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 長友 大幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの環境特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達に応じた自然との係りの理解や、自然体験・自然遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる ・身近な自然や生活と科学との係りの理解や、科学体験・科学遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる ・環境問題の解決と持続可能な社会へ向けた教育（ESD）との係りを理解し、広い視野で自然と子どもの係りを考えることができる 	<p>受講生が1名と言うことで、考え、まとめ、発表する場を作るとともに、机上の知識だけでなく、実験や制作の技能向上のための時間も設けることとした。また、環境という面からは植物を中心とした自然とのふれあい、食生活と環境との関連など、身近な生活と関連づけながら考えられるように指導した。学生は相談相手がないため、様々な面で苦勞したと思うが、意欲的に学習を進めレポート作り、成果の発表などをしっかりと行うことができ、効果的な授業を展開できたのではないかと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 講師
氏名 石橋 優美

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育法法学特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育方法に関する主要理論や概念を理解する。 ・効果的な教育方法や学習方法について、どのようなエビデンスが得られているかを知る。 ・教授学習に関わる今日的課題について、分析・探求する視点を獲得する。 ・教育方法に関する文献を読解する力をつける。 	<p>本授業では、子どもに対する教育方法について、理論的な背景（特に発達心理学、教育心理学、教授学習心理学）から理解し、検討することを目的とした。近年の実証的研究に触れ、心理学の諸分野や心理学の教科教育への応用について学ぶとともに、それらを支える教育方法に関連する心理学等の知見について学んだ。</p> <p>授業において工夫した点は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達心理学研究、教育心理学研究、教授学習心理学研究のなかから、履修生自身が、興味・関心のある論文、研究テーマに即した論文を選び、履修生の研究にも役立てるようにした。 ・論文講読を通じて、科学論文の読み方、研究法について解説し、科学的に理解する力が身につくよう心がけた。 ・討議を通じて、効果的な教育方法に関する諸課題について分析し、考察を深めた。 <p>次年度以降も、履修生の興味・関心が履修生間で異なる場合にも、幅広い視野、多様な視点が獲得できるよう、講読する論文の選択は履修生自身に任せたいと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授・講師
氏 名 川喜田昌代・大島真里子

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
幼稚園教育実践実習	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事例や資料を検討することで幼稚園での教育成果を高める方法を考えること ・事例や資料を検討することで問題解決への的確な提案が出来ること ・模擬授業によって実践知を深めること 	<p>幼稚園教育機関の実践の場の見学を行い、幼児教育の方法や、内容について園長先生へのインタビューを通して、その理解・考察を深めるための機会の提供を行った。</p> <p>そのために、基礎知識の確認を行い、幼児教育をつかさどる保育者の資質能力についても、見学を通して学びを深めることができた。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 客員准教授
氏名 中本 敬子

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
学習心理学特論	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知識やスキルの習得のメカニズムを心理学的観点から理解する。 ・乳幼児期から児童期にかけての知的発達と学習との関連を基礎理論を踏まえて理解する。 ・授業等における幼児・児童の学習を分析的に検討する力を身につける。 ・幼児・児童の学習を支援するための授業や学習環境をデザインするための手がかりを得る。 	<p>受講者が1名だったこともあり、シラバスをベースにして受講者の興味・関心に応じた内容を取り上げることを心がけた。受講生が保育士を志していたことから、特に乳幼児期の言語習得を中心にいくつかの学説や実際の実験研究を扱った。授業の際には対話を重視し、受講者の理解状況や関連して考えたこと等を確認しながら、学習心理学についての知見を深めてもらえるようにした。</p>

5 研究発表会及び意見交換会

大学院担当教員相互の研究交流を図るとともに、学生及び教員との意見交換の場を設け、今後の大学院の教育研究活動の活性化に資することを目的として次の研究発表会及び意見交換会を実施した。

5-1 研究発表会

日 時：令和5年9月13日(水) 11:00～12:00

場 所：埼玉学園大学3号館 5階 503 教室

参加者数：12名(専任教員12名)

内 容： 発表者：奥住 桂 子ども教育学研究科 准教授

テーマ：「日本人英語学習者の英作文における名詞句使用

—熟達度別の構造的特徴比較—

5-2 大学院専任教員・客員教員、大学院学生による意見交換会

日 時：令和5年11月29日(水) 13:00～13:40

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：16名(専任教員14名、大学院生2名)

内 容：

主な意見

- ・大学院の授業では、院生の学びたい事にそった授業を展開してくれるため学びやすかった。
- ・授業内容とともに研究そのものについて学べるように博論を単行本化したものを題材として授業を展開した。
- ・一対一の授業では個に応じた授業を展開できる反面、多様な考えを共有し学ぶ事が難しい。

5-3 専任教員と客員教員による意見交換会

日 時：令和5年11月29日(水) 13:40～14:10

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：14名(専任教員14名)

内 容：

主な意見

- ・院生として学びに対する意欲がみられるものの、教育に関する基礎知識の不足がみられる。

6 論文審査について

本大学院子ども教育学研究科では、修士論文作成過程において、2年次に2回の中間報告会を実施することとしている。各個別報告の詳細は次の通りである。

6-1 修士論文中間報告会

第1回修士論文中間報告会

日 時：令和5年5月25日（木）12：15～12：40

場 所：埼玉学園大学3号館 303教室

【第1回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：10～12：15	研究科長挨拶	
12：20～12：40	22MC0002 中川 寧々	堀田 正央
12：45～12：40	講	評

第2回修士論文中間報告会

日 時：令和5年11月2日（木）12：15～12：45

場 所：埼玉学園大学3号館 304教室

【第2回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：15～12：20	研究科長挨拶	
12：20～12：40	22MC0002 中川 寧々	堀田 正央
12：40～12：45	講	評

6 - 2 学位論文発表会及び最終試験

実施日：令和6年2月8日（木）

学位論文発表会

時間：13：00～13：20

場所：埼玉学園大学3号館 412教室

【学位論文発表会】（1人当たり発表20分）

時間	発表者	指導教員名	修士論文題目
13：00～13：20	22MC0002 中川 寧々	堀田 正央	幼児教育における子どもの主体性理解の検討 —保育のプロセスの質向上にむけて—

最終試験（口述）

時間：13：40～14：00

場所：埼玉学園大学3号館 411教室

【最終試験】（口述）

時間	氏名
13：40～14：00	22MC0002 中川 寧々

7 おわりに(今後に向けて)

令和5年度は、令和4年度のFD活動の報告をもとに、さらなる検討を加えた。先に掲げた各授業の担当教員による「教員の授業報告」及び「大学院専任教員と大学院生による意見交換会」「大学院専任教員による意見交換会」により、院生と各科目担当教員、担当教員同士の話し合いをもとにした授業の振り返りによれば、「教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量」の育成を目指した大学院教育が実施できたと評価できる。また、一期生は、卒業後、修士論文を発展させ、学会においても発表を行っていることも、本研究科における学びの成果である。

今後も、客員教員を含め大学院担当教員は、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材養成を目指す大学院教育の在り方を研究し、実践していく所存である。

埼玉学園大学大学院FD委員会規程

平成22年 5月12日制定

(目的及び設置)

第 1 条 本大学院に、授業内容及び教育方法を改善し、その質的充実を図るとともに、教員の教育力の向上に資すること（Faculty Development。以下「FD」という。）を目的とし、FD委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任 務)

第 2 条 委員会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について組織的な推進を図ることを任務とする。

- (1) FD活動の企画立案に関すること
- (2) FD活動に関する情報収集及び提供に関すること
- (3) FD活動についての評価及び報告書の作成に関すること
- (4) 学長の諮問した事項に関すること
- (5) その他大学院のFDの推進に関すること

(組 織)

第 3 条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 研究科長
- (2) 専攻主任
- (3) 専任教員のうち、研究科委員会より選出された教員 若干名

(任 期)

第 4 条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員長は研究科委員会の議を経て、学長が指名する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(会 議)

第 6 条 会議は、過半数の委員の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

2 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第 7 条 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事 務)

第 8 条 委員会の事務は、事務局教務課において処理する。

附 則

1 この規程は、平成22年4月1日から施行する。

2 この規程施行後、最初に就任する委員の任期は、第4条の規定にかかわらず平成23年3月31日までとする。

大学院子ども教育学研究科
授業担当教員 各位

大学院子ども教育学研究科
FD委員長 堀田 正央

学生向け授業に関するアンケート実施のお願い

埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科の授業につきましては、日頃より格別のご指導、ご配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。

令和〇年度〇期の授業アンケートを下記のとおり実施することとなりました。

つきましては、アンケート実施の趣旨をご理解いただき、実施していただきたく、ここにお願い申し上げます。

ご負担をおかけいたしますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

記

1. 実施期間 令和〇年〇月〇日～令和〇年〇月〇日
2. 対象授業 講義科目、研究指導科目
3. 実施・回収
 - ・アンケートの実施科目は、履修者が2名以上の講義科目及び研究指導科目を対象とする。
 - ・担当教員は所定のアンケート用紙（人数分）及び回収袋（1袋）を授業終了前の10～20分に配布する。
 - ・担当教員は回収袋にあらかじめ実施日・授業担当者を記入する。
 - ・アンケート実施後、学生自身がアンケートを回収袋に直接入れ、最後の学生に封をするよう指示をする。
 - ・封をした学生に教務課へ提出するよう指示をする。
4. 授業アンケート結果の活用
授業アンケートは集計し、FD活動報告書に掲載する。

以上

授業についてのアンケート（講義科目、研究指導科目）

科目名（ ）

教員名（ ）

月 日 曜日 時限実施

※上記、記載漏れがないようお願いします

大学院の授業の質的向上のために、アンケート調査を行います。下記質問について、自由に記述してください。なお、このアンケートが成績評価に影響することは一切ありません。

1. この授業を履修した理由は何ですか？
2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか？
3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。
4. この授業について、要望があれば記入してください。

ご協力ありがとうございました。

参考資料4

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名
氏 名

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、 改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)

中間報告会の振り返り

埼玉学園大学大学院 子ども教育研究科

学生番号	氏名	指導教員名
中間報告会までの準備を振り返ってどのような点が反省点としてあげられますか		
論文指導についての意見は何かありますか		
中間報告会での各教員からのアドバイスは、今後の論文作成において、どのように参考になりましたか。		

※書ききれない場合は、行数を増やしていただいて構いません。